

## 【研究報告】

## 成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況

鈴木香苗<sup>\*1</sup>, 中信利恵子<sup>\*1</sup>, 松本由恵<sup>\*1</sup>, 横山奈未<sup>\*1</sup>,  
山下彰子<sup>\*1</sup>, 岡田淳子<sup>\*2</sup>, 植田喜久子<sup>\*1</sup>

## 【要旨】

研究目的は、成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況を明らかにし、効果的な活用を検討することである。成人看護学実習を4年次前期に履修した看護師4名に半構造的面接を行い、質的帰納的に分析した。ルーブリックの優れた活用では【評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する】【実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する】【日々の実習目標と学習成果を一貫して記録する】【自己評価と教員の評価した実習評価に納得する】が抽出された。一方で【評価基準を意識して実習していない】【不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である】【実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する】【体験にとどまり、評価基準に関連付けて知識を深めていない】という努力を要する活用を行っていた。今後教員は、学生が自己の目標に対して適切な課題を設定できるように支援する必要がある。

## 【キーワード】ルーブリック 到達度 自己評価

## I. はじめに

医療技術の進歩により、短期滞在（日帰り）手術やがん化学療法など高度な治療は外来でも受けることが可能となっている。そのため、疾病を持ちながら地域で生活をしている患者が増え、長期間にわたる外来での継続治療など、外来における継続看護の必要性が高まり（日本看護協会業務委員会, 2011）、臨床現場は多様化し、特定の健康課題に対応する看護実践能力を養うことが求められている。

学生は、これまでの病棟実習において、退院後の生活に目を向けることの重要性は学習しているもの

の、実際に通院治療を受ける患者に関わった経験が非常に少ない状況であった。また、病棟実習において緩和ケアの対象となる患者を受け持つことは、倫理的配慮や心理的な配慮から難しい状況もあった。

A大学では、成人看護学実習において、病棟実習での受け持ち患者の看護実践に加え、手術室・集中治療室・救急外来や、外来化学療法室・放射線治療科・糖尿病センター・透析室などの外来を含めた治療部門、および緩和ケア病棟での専門的知識を持つ看護師の看護実践を体験する実習を組み込んだ。

新たな成人看護学実習では、通院治療を受ける患

表1 成人看護学実習 評価表の一部

1. 特定の健康課題をもつ対象者の状態を査定する方法および看護実践の特徴を理解する。			
1) 治療および療養環境が対象者および家族に及ぼす影響について理解する。			
A	B	C	D
治療および療養環境が対象者および家族に及ぼす影響について、今後の予測を含めて説明できる	治療および療養環境が対象者および家族に及ぼす影響を説明できる	治療および療養環境が対象者に及ぼす影響を記述できる	対象者に行われる治療および対象者の療養環境が分かる
2) 対象者に行われる治療の目的、方法、特徴を理解する。			
A	B	C	D
対象者に行われる治療の目的、方法、特徴と、今後の予測される状況を含めて説明できる	対象者に行われる治療の目的、方法、特徴と対象者への影響を説明できる	対象者に行われる治療の目的、方法、特徴を記述できる	対象者に行われる治療の目的、方法、特徴が分かる

\* 1 日本赤十字広島看護大学

\* 2 県立広島大学

者への看護や、エンド・オブ・ライフケアの実践に関わることができる機会となる実習内容にしたことから、課題であった学生自身による「理論と実践の連繋」や「課題の発見と主体的な行動」の成果を求める実習となった。また、複数の実習内容に対応するために抽象度の高い実習目標となっている。そのため、学生が、専門的知識や技術の体験を通し、実習目標の到達に向かう過程や成果を客観的に評価することが困難であることが予測された。そこで、学生が自分自身の実習目標の達成状況を意識しながら実習していく仕組みを検討した。

点数化および、客観的に評価することが難しいパフォーマンスを評価するために活用されているルーブリックを成人看護学実習の評価表に用いることとした(表1)。ルーブリックとは、学習者の成功の度合いを示す尺度(Scale)と、尺度に示された評点・標語のそれぞれに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語(Descriptor)から成る評価基準表と定義されており(西岡, 2016)、教育評価の領域において活用されている評価ツールである。糸賀(2010)は、学生は「実習目的・目標、評価基準だけでは、一体何を学べばいいのか、どんな力を求められているのかまったくわからない。実習中にルーブリックの評価基準をみながら実習計画に入れたり、実習途中で確認したりしながら、達成できていない課題が達成できるようにしている」と評価していると述べている。研究者らは、成人看護学実習において学生がルーブリックを活用することによって自己の実習目標の達成状況を意識しながら課題に向けて行動できると考えた。学生に対しては、実習目標のそれぞれに評価基準を設定したルーブリックの特徴を説明し、自己の到達度を意識して実習に臨むようオリエンテーションを実施した。

本研究の目的は、成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況を明らかにし、効果的な活用への示唆を得ることである。

## II. 方 法

### 1. 研究参加者

平成27年度前期に成人看護学実習を修了したA大学卒業後1年目の看護師9名に依頼した。

### 2. データ収集方法

- 1) データ収集は、平成28年8～9月にインタビューガイドを用いて半構造化面接をプライバシーが確保できる個室で実施した。
- 2) 調査内容は、研究参加者自身の成人看護学実習

の体験、評価表を活用する目的の理解等であった。

### 3. 分析方法

作成した逐語録をくり返し読み、質的記述的に分析を行った。意味内容が損なわれないよう成人看護学実習におけるルーブリックを用いた評価表の活用状況に関する箇所を抽出し、コード化した。データの類似性、相違性を比較して、サブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。研究者らによる分析を繰り返し、真実性、妥当性の検討を実施した。

### 4. 倫理的配慮

本研究は、A大学研究倫理・審査委員会の審査を受け承認を得て実施した(No.1511)。

調査への協力は、自由意思に基づくものであり、どんな場合でも就業上の不利益を受けないこと、得られた情報の秘密は厳守されること、研究目的以外での目的で使用しないことについて文書を用いて説明し署名にて同意を得た。得られたデータは、研究者によって個人が特定されないよう連結不可能匿名化したうえで研究に使用した。逐語録の作成時は、個人が識別できる情報を取り除き、新たにID等をつけて匿名化した。

## III. 結 果

### 1. 研究参加者の概要

研究参加者のうち同意の得られたものは4名で、全員がB病院所属の入職1年目の新人看護師4名、平均年齢22歳であった。面接時間は35～60分(平均43.5分)であった。

### 2. ルーブリックの活用状況(表2)

分析の結果、ルーブリックの活用状況として、8カテゴリーが抽出された。8カテゴリーは、ルーブリックの優れたあるいは努力を要する活用に大別された。

以下にカテゴリーの内容を説明する。【】はカテゴリー、<>はサブカテゴリー、「」は研究参加者の語りを示す。

#### 1) ルーブリックの優れた活用状況

ルーブリックの優れた活用状況は、【評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する】【実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する】【日々の実習目標と学習成果を一貫して記録する】【自己評価と教員の評価した実習評価に納得する】であった。これらは、ルーブリックを自分なりの方法で使

表2 成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況

カテゴリ	サブカテゴリ
評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する	どの目標をどのような実習内容で到達するか自分で決めた 指導者が評価基準の到達につながる質問をしてくれた
実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する	指導者と意見交換しないと到達できない目標だから事前学習してから質問したりした
日々の実習目標と学修成果を一貫して記録する	ルーブリックを活用して実習目標と実習記録を書いた 評価基準と到達度の認識が共有できる
自己評価と教員の評価した実習評価に納得する	自己評価の根拠を説明できる ルーブリックの活用方法を理解し活用している 教員の評価した実習評価に納得できる
評価基準を意識して実習していない	ルーブリックの評価基準の活用方法の説明を覚えていない ルーブリックの評価基準を見ながら実習していない
不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である	実習目標が理解しにくくどのように到達したらよいか分かりにくい 実習前に目標達成のための自己学習が明確にできない 外来における看護実践がイメージできていない 通院治療中の患者の生活を支援することがイメージできない ICU・ERの看護の学習内容が明確にできない
実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する	体験して理解することがある 事前学習していたらもっと理解できたと思う 知識は自己学習よりも指導者から教えてもらったと思う 知識不足により体験から考えることができない
体験にとどまり、評価基準に関連付けて知識を深めていない	実習中に事前学習の不足に気付く 実習記録は指導者さんの話から書いていた 実習指導者と実習目標、到達度について話すことができない

いこなし、自己の到達度を意識して実習している状況であった。

(1) 【評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する】

このカテゴリは、《どの目標をどのような実習内容で到達するか自分で決めた》というサブカテゴリで構成された。研究参加者は「どの目標をどの実習場所で実行して達成するか自分で決めた」と語り、評価基準を自分の行動レベルで考えてどのような実習をするかを自分で考えることができていた。

(2) 【実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する】

このカテゴリは、《指導者が評価基準の到達につながる質問をしてくれた》《指導者と意見交換しないと到達できない目標だから事前学習してから質問したりした》の2つのサブカテゴリから構成された。研究参加者は「実習指導者が（より高い）到達度につながるような質問をしてくれた」と語り、実習指導者からの助言が実習目標の評価基準を満たすために活用できることに気づいていた。また、実習指導者と意見交換するという手段を用いて目標達成に向けて行動することがで

きていた。

(3) 【日々の実習目標と学習成果を一貫して記録する】

このカテゴリは、《ルーブリックを活用して日々の実習目標と実習記録を書いた》から構成された。研究参加者は「到達度の内容を実習場所に当てはめて日々の実習目標を考えておくと記録が書きやすかった」と語り、日々の実習目標をルーブリックの評価基準に置き換えて設定することによって、実習目標の到達を意識した体験や体験に基づく考察を記述するよう取り組んでいた。

(4) 【自己評価と教員の評価した実習評価に納得する】

このカテゴリは、《評価基準と到達度の認識が共有できる》《自己評価の根拠を説明できる》《ルーブリックの活用方法を理解し活用している》《教員の評価した実習評価に納得できる》から構成された。研究参加者は「先生と到達度を共有できた」と語り、ルーブリックを教員と学生の共通の評価基準であることを認識し、自己の目標到達度を説明できるツールであることを認識していた。

2) ルーブリックの努力を要する活用状況

課題となる活用状況は、【評価基準を意識して実習していない】【不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である】【実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する】【体験にとどまり、評価基準に関連付けて知識を深めていない】であった。これらは、ルーブリックの理解が不十分であり、どのように使えばよいか分からないまま実習している状況であった。

(1) 【評価基準を意識して実習していない】

このカテゴリーは、《ルーブリックの評価基準の活用方法の説明を覚えていない》《ルーブリックの評価基準を見ながら実習していない》の2つのサブカテゴリーから構成された。「評価基準を見ながら実習していない」のように、ルーブリックの説明を記憶しておらず評価基準を見ながら実習を行っていない研究参加者もいた。

(2) 【不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である】

このカテゴリーは、《実習目標が理解しにくくどのように到達したらよいか分かりにくい》《実習前に目標達成のための自己学習が明確にできない》《外来における看護実践がイメージできない》《通院治療中の患者の生活を支援することがイメージできない》《ICU・ERの看護の学習内容が明確にできない》の5つのサブカテゴリーから構成された。研究参加者は「実習途中で、というのが目標達成になるのか分からなくて、ルーブリックを見たが、分からないままだった」と語り、評価基準を具体的に行動目標にできていない状況があった。

(3) 【実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する】

このカテゴリーは、《体験して理解することがある》《事前学習していたらもっと理解できたと思う》《知識は自己学習よりも指導者から教えてもらったと思う》の3つのサブカテゴリーから構成された。研究参加者は「実習内容やルーブリックの内容が分からないまま実習した」と語り、実習内容や実習場所の看護の特徴をイメージできていなかったため、自己学習が不足していたことに実習開始後に気づく状況であった。

(4) 【体験にとどまり、評価基準に関連付けて知識を深めていない】

このカテゴリーは、《知識不足により体験から考えることができない》《実習中に事前学習の不足に気付く》《実習記録は、指導者さんの話から書いていた》《実習指導者と実習目標、到達度について話すことができない》の4つのサブカテゴリーから構成された。研究参加者は、「到達度が分からなかったので、目の前で起きていることと自己学習をつなげることもできなかった」と語り、実習指導者の看護実践を見学し、体験しているものの看護実践の意図や根拠について考察を深めることが困難であった。

について話すことができない》の4つのサブカテゴリーから構成された。研究参加者は、「到達度が分からなかったので、目の前で起きていることと自己学習をつなげることもできなかった」と語り、実習指導者の看護実践を見学し、体験しているものの看護実践の意図や根拠について考察を深めることが困難であった。

## IV. 考 察

### 1. 学生のルーブリックの活用状況

学生のルーブリックの優れた活用として抽出された、【評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する】【実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する】は、学生がルーブリックをもとに、実習方法を決定し、実習目標の到達に向けて主体的に行動した成果であると考えられる。つまり学生は、求められている到達度を考えて、実習目標の達成には具体的に何が必要かイメージできていることが考えられる。また、【日々の実習目標と学習成果を一貫して記録する】は、学生自身が目標達成のためにルーブリックから目標を設定し、目標達成に向けて行動したこと、行動から学んだことを一貫して記録することができていたと考えられる。

一方、学生のルーブリックの努力を要する活用として抽出された、【評価基準を意識して実習していない】は、実習中に学生自身が目標の達成度を意識できていなかったことが考えられた。また、【不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である】【実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する】は、実習場所における看護の特徴をイメージできるまでの事前学習ができていないために現れた状況であると考えられる。事前学習、看護の特徴を捉えることが不十分であることから、【体験にとどまり、評価基準に関連付けて知識を深めていない】という状況となっていることが推測された。努力を要する活用では、実習内容の理解が曖昧で、求められている到達度を考えることが難しいことから、具体的な行動目標を考えることが困難となり、受動的な実習となっていることが考えられた。

### 2. ルーブリックの効果的な活用への示唆

専門的知識を持つ看護師の看護実践は、学生にとってイメージしにくく、学生にとって学内で学習した内容と実習における体験を結びつけることは容易ではないことが推測される。糸賀（2017b）は、学生にとってのルーブリックとは、学生自身が実習のねらいに沿ってルーブリックを活用して、大切な

ポイントを道標に自らの目標に向かって学習計画を立てて学ぶための評価基準になるものと述べている。研究参加者は、【評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する】【実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する】と実習目標の到達度を実習前や実習中に意識していた。学生は、自ら実習場所に応じて学習すべきことを考える必要があり、学習すべきことを明確できた学生は、評価基準を意識して実習に取り組むことができ、主体的な学びができると考える。中西（2016）は、「学びに向かう力」とは課題の質を問い探求する力、「学ぶべき問いを見出す力」であり、「学ぶべき問いを見出す力」を育成するためには、実際に学習者自身が課題を設定し、情報を収集・整理・分析し、明らかになったことをまとめ・表現して、そこからまた新たな課題を見つけるといった「問題解決のサイクル」を繰り返す学習が重要であると述べている。そのため教員が行う学習支援として、「学ぶべき問いを見出す」ことがスタートとなると考える。本宮（2016）は、探求的な学習として、どのような問いを設定するかは、その後の学びの深まりに大きく影響すると述べている。本研究の結果より、努力を要する活用となっていた学生は、実習内容の理解が曖昧で、求められている到達度を考えることが難しいことから、具体的な行動目標を考えることが困難となり、受動的な実習となっていた。学生が実習開始前から実習目標、ルーブリックの評価基準を具体的な行動に置き換えて考えることができるような支援が求められていると考える。学生が実習における適切な自己の課題を設定するためには、実習場所における看護をイメージし、実習で学生として学び取る内容を理解する必要がある。本研究の【不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である】【実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する】といった結果より、学ぶべき問いを見出すことは、個人の取り組みには限界があることも考えられる。そこで、複数人で、ルーブリックをもとに、これから実習で体験する臨床における専門性の高い看護実践を予測したり、学ぶべき問いを導きだしたりといったグループワークを行ったうえで実習に臨むことができるよう工夫を検討していきたいと考える。

また、学生が目標達成に向かって努力するためには、求められている到達度と現在の自分の到達度を認識することが重要であると考えられる。糸賀（2017a）は、教育は、学び手一人ひとりが自分の力に応じて、教師の支援を得ながら、最終的には無事自分の足で目的地に至ることを目指すものであると述べてい

る。ルーブリックの優れた活用により学生は、実習中から形成的評価を実施しながら、目標達成に向かって学ぶおもしろさやより高い評価基準を目指すことにより達成感を実感することができると考える。

さらに教員は、実習開始前から学生と積極的に対話することによって、学生が自己の実習目標の達成状況を意識しながら課題に向けて行動できているか確認すること、学生が適切な課題を設定できるように助言することが求められていると考えられる。安酸（2015）は、経験型実習教育を提唱し、経験型実習教育における授業過程モデルとして、教員は学生が豊かな直接的体験ができるように学習環境を整え、反省的経験の過程が促進されるような学習の場を準備し、学生による探求が進むように支援すると述べている。ルーブリックの効果的な活用を支援する過程は、グループ学習により実習に向かうレディネスを整え、実習前から学生の反省的経験が促進するように積極的な対話を行うことができると考えられる。

生涯学び続けることができる看護師になるためには、看護基礎教育の過程で自己の目標や課題を明確にし、達成へ向かって行動するプロセスを学ぶ必要がある（長内、村田、2010）。学生がルーブリックを自分のものとして活用した実習経験をもとに、その後の看護学実習や、看護師としての看護実践に取り組むうえで、自己の課題を明確化し、どのように行動するか考える能力の育成につながると考える。

その結果、看護学実習を通して、近年重視されている「考え抜くちから（シンキング）」や「チームで働く力（チームワーク）」「前に踏み出す力（アクション）」といった社会人基礎力の育成にもつながっていくことが期待される。

## V. 結 語

1. 成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況として、8カテゴリーが抽出された。8カテゴリーは、ルーブリックの優れた活用状況【評価基準の達成に向けて実習方法を自己決定する】【実習指導者の指導内容を目標達成のために活用する】【日々の実習目標と学習成果を一貫して記録する】【自己評価と教員の評価した実習評価に納得する】の4カテゴリーと、ルーブリックの努力を要する活用状況【評価基準を意識して実習していない】【不明瞭な目標達成度の理解により自己学習が不十分である】【実習内容の理解が曖昧なまま実習に参加する】【体験にとどまり、評価

基準に関連付けて知識を深めていない】の4カテゴリーに大別された。

2. 学生のルーブリックの効果的な活用を支援する方法として、教員は、実習グループと積極的に対話し、自己の実習目標の達成状況を意識しながら課題に向けて行動できているなどを確認し、学生が目標に対して適切な課題を設定できるように支援する必要がある。

## VI. 本研究の今後の課題

本研究においては、成人看護学実習における学生のルーブリックの活用状況を学生からのインタビューから明らかにし、効果的な活用への示唆を考察した。今後は、優れた活用がその後の学生にどのような影響を与えているのか調査し、ルーブリックの有用性を検証していくこと、ルーブリック自体の評価基準についての妥当性を検討していくことが必要である。

### 謝 辞

本研究を行うにあたり、ご協力いただきました卒業生の皆様、所属施設の看護部の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

本研究は、平成26～27年度日本赤十字広島看護大学共同研究費（研究代表者鈴木香苗）の助成を受けて実施したものであり、結果の一部を日本看護研究学会中国・四国地方会第30回学術集会において発表した。

### 文 献

本宮裕示郎（2016）. 評価を活かした指導の在り方—検討会に焦点を合わせて. 西岡加名恵（編）, アクティブ・ラーニングをどう充実させるか 資質・能力を育てるパフォーマンス評価（pp.120-127）. 明治図書出版.

糸賀暢子（2010）. 成人看護学実習「クリティカルケア実習」「逆向き設計」による実習設計の実際 II 糸賀暢子, 元田貴子, 西岡加名恵（編）, 看護教育のためのパフォーマンス評価 ルーブリック作成からカリキュラム設計へ（pp.87-107）. 医学書院.

糸賀暢子（2017a）. 学校カリキュラムの全体像 糸賀暢子, 元田貴子, 西岡加名恵（編）, 看護教育のためのパフォーマンス評価 ルーブリック作成からカリキュラム設計へ（pp.127-151）. 医学書院.

糸賀暢子（2017b）. 特集 実践力向上の実習評価へ—ポートフォリオ&ルーブリック実践ガイド—基礎看護学実習での導入—ポートフォリオとルーブリックを用いた評価の実際. 看護教育, 51(12), 1048-1056.

中西修一朗（2016）. 「学びに向かう力」を育てるカリキュラム—探求的な学習をどう位置づけるか. 西岡加名恵（編）, アクティブ・ラーニングをどう充実させるか 資質・能力を育てるパフォーマンス評価（pp.102-109）. 明治図書出版.

日本看護協会業務委員会（2011）. 外来における看護の専門性の発揮に向けた課題. 公益社団法人日本看護協会.

西岡加名恵（2016）. パフォーマンス課題とルーブリックの作り方, パフォーマンス評価法の進め方. 西岡加名恵（編）, アクティブ・ラーニングをどう充実させるか 資質・能力を育てるパフォーマンス評価（pp.22-32）. 明治図書出版.

長内志津子, 村田千代（2010）. 看護総合臨床実習において成人看護領域の学生が自覚した学び—実習前の準備・実習の展開・実習のまとめのレポートより—. 弘前学院大学看護紀要, 5,1-10.

安酸史子（2015）. 経験型実習教育の展開. 安酸史子（編）, 経験型実習教育—看護師をはぐくむ理論と実践（pp.52-59）. 医学書院.

# State of rubrics use by students in adult nursing practicums

Kanae SUZUKI<sup>\*1</sup>, Rieko NAKANOBU<sup>\*1</sup>, Yoshie MATSUMOTO<sup>\*1</sup>, Nami YOKOYAMA<sup>\*1</sup>,

Akiko YAMASHITA<sup>\*1</sup>, Junko OKADA<sup>\*2</sup>, Kikuko UEDA<sup>\*1</sup>

## Abstract:

This study aimed to clarify the state of rubrics use by students in adult nursing practicums, and to consider its effective use. Semi-structured interviews were held with 4 nurses who completed adult nursing practicums in the first semester of their 4th year, and the interview contents were qualitatively and inductively analyzed. Extracted categories relating to the effective use of rubrics included “self-determination of training methods aimed at achieving evaluation criteria,” “use of content taught by practicum instructors in order to achieve goals,” “consistently record daily training goals and learning achievements,” and “agree with self-evaluation of evaluation of practicum by instructors.” On the other hand, the following categories related to challenges associated with rubrics use were extracted: “participate in practicum without being mindful of evaluation criteria,” “insufficient self-learning due to a poor understanding of degree of goal achievement,” “attend practicum with only a vague understanding of practicum content,” and “limit experience to that in practicum, without deepening knowledge to link training to evaluation criteria.” In the future, instructors will need provide support that enables students to set tasks that are appropriate for their own goals.

## Keywords:

rubrics, level of achievement, self-evaluation

---

\* 1 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing \* 2 Prefectural University of Hiroshima

